
彼女のお面 改良？版

傘月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼女のお面 改良?版

【Zコード】

Z5407P

【作者名】

傘月

【あらすじ】

前に書いた「彼女のお面」の改良?版です。会話分のみだったお話を普通のお話仕立てにしました。誰が狂っているのでしょうか。私も解りません。

簡素なスチールテーブルの上には蛍光灯ランプとカルテ。壁には製薬会社の名前が記されたカレンダー。簡易ベッド、薬品の香り、並ぶ椅子。どれをとっても平均的な診察室の風景。

「被我さんについてですか？　えっと、それは私の頭痛に関係があるのでしょうか？」

彼女はおどおどと言ひ、「めかみに手を当ててるのは頭痛のせいか。

「ええ、少し、気になつたものですから」

向かいに座る恰幅の良い医者は言ひ。少し表情が険しい。彼女の頭痛はあまり良い状態ではないのだろうか？

「……はあ、解りました。お話しします。」

彼女は釈然としない面持ちで話し始める。

「被我さんは私の右斜め後ろの、大体四十五度ぐらいの所にいます。

「それはいつもいらっしゃるんでしょうか？」

「あ、いえ、いつもでなく、たまに、です。」

「今はいらっしゃいますか？」

「…………たぶん、いるんじゃないから。いるかないかわからないときもあって、今がそんな感じです」

「解りました。」

医者がカルテに筆を走らせる、何かいろいろと書いているようだ。

「話し掛けられたりというの？」

「そりや、普通にお話はしますよ。ただ、私は彼の顔を見たことがないんです。何度か振り返るんですが、いつもどこかに隠れてしまうみたいで……極度の恥ずかしがり屋なのでしょうか」
彼女が訥々と語る。恥ずかしがり屋。なるほどそう思われても仕方ないのかもしない。

「私、昔虚められていたんです。不細工だったんで……」「そんなことありませんよ。貴方はかなりお綺麗じゃないですか」

「それはそうだ。私の好きな彼女は不細工な訳がない。」

「そんな、お綺麗だなんて。これにもちゃんと訳があるので」「ああ、その話をするのか。それはあまり話して欲しい訳じゃないのだが……まあいい、彼女の選択なら仕方ない。」

「確かに、小学校四年生ぐらいの頃だつたかしら？　被我さんに誕生日プレゼントとしてお面を頂いたんです。とても可愛い女の子の

お面。それをつけていけば虚められなくなると言わされて、半信半疑でつけて学校へ行つたんですけど、その日を境にいじめはぱつたりと無くなつたんです。」
「…………」

医者は無言でじつと彼女を診ると、さらさらと急いでカルテを書いた。

「今日はお一人でいらっしゃったのでしょうか？」

「いえ、主人が外で待つております」

「よろしければご主人と一緒にお話をさせて頂きたいのですが、よろしいでしょうか」

「えつ、私そんなに悪いんですか？！」

「彼女の顔に不安の色が浮かぶ。」

「いえ、大丈夫なのですが、少し気になることがあります」

医者は落ち着き払つて彼女にそう伝える。

「じゃあ、心配はいらないんですね」

「ええ。頭痛に関しては、大丈夫です」

「ありがとうございます。では、主人を呼んできますね」

「妻が異常？　何を根拠に、馬鹿馬鹿しい」

「彼は盛大に笑つた。」

医者に、彼女の神経はすこしおかしいようだ、心を診てくれる病院へ行つた方が良いと勧められたのだ。

「いや貴方笑い事じやないですよ。彼女には被害妄想、といふか被我さんという人物に観察されていると思い込んでいた節があるみたいで、しかもその人物と会話をしているそなんですよ？ これが異常でなくなんだと言うのですか」

医者は自分の言つたことが信じてもらえていないと思つたのか、心外だと言いたげな苦々しい口調でそう言い切つた。

「ああ、被我さん？ 被我さんなら知つてますよ。僕の良き友人で、僕の」

彼が口^ごもる。そしてチラリと後ろを見た。ニヤリと笑うと前へ向き直る。

「そうですね、勘違いされて妻を狂人に仕立て上げられるのも癪ですし、全てお話ししましょう」

彼は大きな態度で話す。

「実を言つとですね、妻には内緒にしているんですが、被我さんは僕なんですよ。僕が死んだ後の魂、つまり未来の僕です」

さあどうだといわんばかりの偉ぶつた口調で言つ。

医者は唖然とした様子でそれを見ていた。が、はっと我に返つて彼に反論する。

「なんだそれは。非科学的だ。あり得ない。」「冗談もほどほどにして下さい。奥様のことが心配ではないのですか？！ 奥様は自分の顔が幼少期に被我さんという人物に貰つたお面だとも言つているんですよ！ おかしいですよ！」

「ん？ お面？ ああ、参つたなあそんな話もしたのか」
バ力にされたと思つた医者の激昂した反論に、彼は涼しい顔で応える。

「……待合室にある行方不明の少女のポスター、見てらつしゃいますよね？ あれ、失踪時の服装が先日発見された首無し死体と似ていると思いませんか？ 顔なんて、失踪した方のほうがちょっと童顔ですがうちの妻にそっくりだ」

「そ・・・・・それがどうした！ いつたい何の関係が・・・・・

・

そこまで言つと医者の顔色がサッと青くなつた。

まさか、と口ごもる。いやそんなはずはない、とも口ごもる。

「昨日やつと皮を剥ぎ終えたんですよ、なかなか骨が折れますよ、生身の人間から皮だけを綺麗に剥ぐなんて」

ガタン、と医者が椅子から崩れ落ちた。わなわなと震えて怯えた目で彼を見ている。いや、違う。私を見ている。

私が見えるのか。それならこの反応はしうがない。

「まあそつビックリなさらいでください。医者が青い顔をしてどうするんです。つまり現在の僕が妻のお面を作り、被我さんが時間を越えて幼い彼女にお面を与えたのですよ」

彼は医者の怯えようが自分のせいと勘違いして得意げに話を進める。彼は大きな勘違いをしていて、それは時に私を困らせ、時に私を楽しませてくれる。とても滑稽な存在だ。

「僕はね、僕と出会つてからの彼女の人生だけでなく、生まれてから死ぬまでの彼女の人生全てを愛したいと願つたのです。僕は今とても幸せなんですよ」

「そつ、そんなことはどうでもいい！ 警察を呼ぶぞ、俺は警察を呼ぶぞ……！」

医者といつのは頭の良いものだと彼女に教わつたがそんなことはないようだ。どうやら警察を呼びたいようだが医者はわなわなと震えるほか少しも動かない。

「警察に通報するだつて？ ……それはいけませんなあ、医者には守秘義務というものがあるのでないのですか？」

「かつ、からだがうごかん。お前、なにかしたな！！ 別に私は何もしていないのだが。

「おや、動けない？ 金縛りだ、と？ そりやあ後ろで被我さんがあなたを羽交い締めにしているんですから当たり前ですよ」

だから別に私は何もしていないのだが。

「僕と彼女に刃向かうものは、全て壊すのみですよ。」ひちらのカツ

ター、お借りしますね。返すことはないでしょうけど

彼がペン立てからカッターナイフを取り出したのを見て、私は診察室を出た。待合室に向かうと、彼女は座つておとなしく本を読んでいた。

彼女の右斜め後ろ四十五度の場所に立つ。少女の失踪を知らせるポスターが目にに入った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5407p/>

彼女のお面 改良？版

2010年12月16日23時56分発行